

あぶり餅



苫小牧市医師会
植苗病院

一ノ橋 英 孝

北海道医師会会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひ致します。年男・年女の中から無作為に選出され、この文章を書いています。

私は京都府出身で、福井医科大学（現福井大学医学部）を卒業し、京都大学医学部の精神神経科に入局後、香川県や京都府で勤務し、平成21年北海道に came。京都の病院では精神科救急や簡易鑑定他司法精神医学も経験しました。北海道に住んでみて、まずは北海道の自然の雄大さに感動し、また、海鮮や野菜などの食べ物がおいしいと感じました。赤飯に甘納豆が入っているのには最初は慣れませんでした。北海道の夏は過ごしやすいですが短いのが寂しく、冬の寒さと雪の多さには驚き、車の運転も怖かったのを覚えています。今では北海道の気候にも慣れ、割と快適に過ごしています。

私は年に1回ぐらい家族と京都の実家に帰るのですが、帰った時には必ずと言ってよいほど「あぶり餅」という餅菓子を食へに行きます。あぶり餅とは京都市北区にある今宮神社の名物で、神社の参道を挟んで2件のお店が向かい合っています。餅を親指大にちぎり、きな粉をまぶし、それを竹串に刺し、店先の炭火であぶり、甘い白味噌をかけた餅菓子で、一人前で15本入っています。値段は一人前が500円だったと思います。あぶり餅の歴史は古く、一説では平安時代中期に一条天皇の子が疫病を患った時、疫除けの願いを込めて今宮神社に奉納されたのが始まりだといわれ、参拝した際には無病息災を祈り、あぶり餅を食べるのが風習となって今に至っているといわれているそうです。お店自体も風情があり、店先や店内で食べるとより一層京都らしさを感じられます。あぶり餅はテレビなどでも放映されたこともあるのでご存知の方もおられるかと思いますが、タクシーなどでも観光客の方も来られています。私の子どもも大好きで、2人前はペロッと食べます。ちなみに京都の嵯峨というところにもあぶり餅を食べられるお店があるようです。

京都へのご旅行の際には一度行かれてはいかがでしょうか。

年男所感



旭川医科大学医師会
旭川医科大学病院 産科婦人科

上 田 寛 人

私は昭和56年生まれの酉年で、干支が3週したところでございます。干支といっても年賀状の絵柄の一つくらいにしか考えたことがなく、年男の実感はありません。しかし、教授からのご指名により、勤務医部会若手医師専門委員会の委員を拝命することとなり、入会したばかりの北海道医師会から『新春随想』の原稿執筆依頼が届く事態となりました。何を書いたらよいものか見当もつきませんが、せっかくだのでこれまでの医師人生について考えてみたいと思います。

私が旭川医大を卒業したのは平成18年で、市中病院での研修を希望し、名寄市立総合病院で初期研修医となりました。短期間で所属が目まぐるしく変化するローテーション研修は何かと大変でしたが、研修医に任せていただける領域も多く、充実した2年間を過ごすことができました。医師3年目で旭川医大産婦人科に入局し、大学周産期チームの配属となりました。その時点では周産期が将来の専門となることは全く予期しておりませんでした。結果的に大学で経験した難症例や先輩の熱心な指導が、その後の人生に大きく影響することとなりました。関連病院への出向と国内留学を経て平成24年に大学へ戻ったときには医局が既に極度の人手不足となっており、幸か不幸か医師7年目から周産期チームの主力を務めさせていただくことができました。気付けば大学に戻って5年の年月が経過しようとしており、最初の大学勤務でお世話になった先輩方と近い年季になってまいりました。初回妊娠時に大変な経過をたどった妊婦さんが、2度目、3度目の妊娠で再び私の外来を受診してくれることが徐々に増えてきており、当院で生まれたお子さんの成長とお母さんの笑顔を見ることができているのが産科医としての日々の喜びであります。

医師となつてがむしゃらに走ってきた11年。周産期専門医や医学博士など目標としてきた資格は概ね取得することができました。今後は自分自身のキャリアだけでなく、道北地域における周産期医療体制の整備や、後輩の育成についても考える時間が増えてくるように思います。干支がもう一回りしたとき、自分がどんな産科医になつていて、道北の周産期医療がどのように変わっているのか、今はまだ全く想像がつきません。忙しい毎日の中で考えることを忘れそうになりつつある自分にとって、今回の執筆は良い機会となりました。このような場を与えていただいた北海道医師会の皆様に感謝申し上げます。